

# 農村の活性化を模索

## 藤岡さん(く)が岡谷で研修

岡谷市を拠点に農村生活の 営利活動法人(NPO法人) 調査研究を行っている特定非 農と人どくらし研究センター



三沢区の区民農園でヤギの世話をする藤岡さん

(同市川岸中、片倉和人代表)で、茨城県つくば市の農業関連会社経営、藤岡潤さん(30)が農村の活性化について学んでいる。「いろんなアプローチの仕方を学び、この経験を今後に生かしたい」と意欲的だ。藤岡さんは、つくば市生まれ。大

学卒業後はIT業界の仕事に就いた。農業とは無縁の生活だったが、高騰を続ける国際食料価格や食料輸出の輸出規制の動向などを知り、当たり前のように食料が買える生活が崩壊するリスクを考えると、次世代に対応する可能性を持った農業を目指すべく、2008年に会社を設立した。

岡谷市での研修は、同市三沢区の区民農園の運営に参加しながら、農業、養蚕の復活・再生、直売所と区民農園事業の活性化という課題解決を目標とし、取り組んでいる。農村地域への従事を希望する都市部の人々と農村地域とのマッチングを図る農林水産省の人材育成派遣支援モデル事業

「田舎で働き隊！」に応募したのがきっかけ。農と人どくらし研究センターは同事業の受け入れ先となった。

3月8日までの滞在期間中、集客力がある農産物直売所の提案、各種資料整理、区民農園事業の活性化に向けた検討会議への参加を予定している。地元でヤギを飼っていることから、機械の代わりにヤギを使って耕作放棄地などの除草を行う事業も検討。三沢区の区民農園のヤギの世話をしながら、食性や除角技術も学んでいる。

つくば市では、約40坪の農地でさまざまな野菜を生産。ビニールハウスでイチゴの栽培に力を入れ、直売所で販売もしているという。藤岡さん

は「農業で生計を立てるのはとても難しいが、農業は人間が生きて行く上で欠くことができない産業。農業と関連付けながら、食料生産、環境、教育、レジャー、保険へとさまざまな分野で社会に必要なサービスやシステムを提供していきたい」と夢を語った。(野村知秀)